

二〇二二年二月二二日

着膨れてエレベーターにこぼれけり
よくとほる声の披講や青畝の忌
柚子の香の一番風呂に浸りけり
裸木の天へ振り上ぐ力瘤
ご自由にどうぞと小玉柚子を盛る
街師走宝くじ屋に長き列
夫癒へて吾が手術待つ冬至の湯
しばらくを柚子と遊びて冬至風呂
病とも仲良しになり冬至粥

二〇二二年二月二二日

鳶舞へる谷戸の冬至の空暗し
無駄力抜けて余生のちゃんちゃんこ
いか墨に指染めて売る年の市
痛むひざ撫でつつ浸るゆず湯かな
天窓の一枚青き冬の晴
手袋を外して手話の弾みをり
極月の畑に一筋煙立つ

二〇二二年二月二〇日

冬日いま翁の塚を抱擁す
年惜しむ水かけ不動に水掛けて
彩窓のマリアの像に冬日燦
亀の池亀みなもぐり冬ざる
杉の秀に一声高し冬の鵲
饒舌と仏頂面の日向ぼこ

二〇二二年二月一九日

師走妻庚申堂は素通りに
毀たれしビルの虚空に月冴ゆる
義太夫の墓へも詣で年惜しむ
身に入むや港に魚の供養塔
冬うららおもかる文殊軽きかな

つくし	菜々	せいじ	有香	こすもす	さつき	よし女	はく子	三刀	雅流	宏虎	なつき	満天	とろうち	さつき	有香	菜々	はく子	つくし	菜々	雅流	宏虎	菜々	せいじ	わかば	満天
-----	----	-----	----	------	-----	-----	-----	----	----	----	-----	----	------	-----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	-----	-----	----

暮れ残る富士のてっぺん冬の鵲
凍土をひづめが削る馬の径
朝市の売手買手と息白し

二〇二二年二月一八日

ひび割れて水生花苑池涸れる
笹子鳴く裏山包む夕帷
推敲す黙のひと時冬座敷
行く人の足をとどめる冬桜
己が影纏ひて眠る甲斐の嶺々
夫盾にマスクの妻の付き行けり
初雪やふるさとの幸届きし日
句碑歌碑に添ひてたわわや実南天
膝ついて藁苞覗く寒ぼたん

二〇二二年二月一七日

碁敵の沈黙思考懐手
身に入むや家打ち壊すブルトーザ
ショッピング手間取りし間に時雨れけり
参道に万華鏡なす彩紅葉
煤払ふにも順序ある大伽藍
神木に宿り木あまた冬ざる
神鶏の真白が突く落葉嵩
庖丁を磨き上げもす年用意

二〇二二年二月一六日

一尋に余る魚版や冬館
花時計総入れ替へし年迎ふ
冬鴉遺跡調査の田を突く
トンネルを抜けて山河の冬景色
冬うらら犬を待たせて投票す
蒸し立てのおこわの湯気や果大師

とろうち	なつき	宏虎	わかば	雅流	ぼんこ	満天	とろうち	なつき	よし子	きづな	ぼんこ	せいじ	百合	きづな	とろうち	なつき	あさこ	菜々	つくし	せいじ	わかば	せいじ	なつき
------	-----	----	-----	----	-----	----	------	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	------	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----

毎日句会みのる選・二〇二二年二月二七日